

買戻しにはるばる来たこと。主従の對面、トムはこの喜びのあまり遂に死んだこと。シエルビー歸宅しその由を妻子に語り共に悲歎に沈むこと。シエルビー遂に奴隷を開放して自由のもとに幸福な生涯を送せるやうになつたこと。について簡單にお話しました。

今日は世界歴史の第一頁である。今日の世界を以て眞正の世界歴史は其程を發する。社會的煩悶は歐西社會に於ては既に彼が如く、而して我に於ても亦多少性質の差を以て之無きに非ずである。世界全體の現状を達觀すれば、個人でも、家族社會でも乃至世界社會即ち列國關係でも、其の均齊は不安定均齊に止まり、隨つて社會的煩悶は一般である。就中列國關係に於ける均齊の不安定は、最も重大にして危殆なる情勢に於てある。噫、今より一世紀の後、世界の地圖は果して如何に易るべきか。(中略)併しながら、斯の如き世界的大活劇を支配するものは誰であるか、天に非ずして實に人である。他人に非ずして而して吾人、即ち今日の世界歴史の第一頁に於ける活動人物である。(中略)是れ空想の問題に非ず、是れ事實の問題である。觀察に始りて經論に移る。即ち是れ丈夫の事である。——建部遜吾(世界列國の大勢)

研究

◎シヨツベンハウエルの女子に就いての論文と、ラスキンの「セサム、アンド、リリース」中のリリース、オフ、クウインズ、ガーデンス」とを讀みて、兩者より提供せられし若干の問題を思ふ (承前) 千葉 安 良

第三、以上の三問題に對する批評及び論斷  
(二) 兩性論の範圍に入るべき諸問題

本章に於いて考へます事項は、既に第二論に於いて豫告致しておきましたやうに、男女の存在の意味から、その差異、その關係、夫婦論、結婚論と云ふ誠に重大なものでございます。そして其の内容は所謂婦人問題に關する所が多く、婦人問題解決の一要素となるべきものであり、且つ又問題それ自身が人生の意義を斷

する骨子となる性質のものなのであります。それ故本章の所論は、おほらかに「女性の概念」として、本章の結論の上に立脚して第一章に論じたものとは又大層面目のちがふ最も嚴肅なる最も深さのある批評や立論がせられねばならないのであります。

此の用意を以て私が本問題に筆を執らうと致しました時に私は次の二點から今日此の問題に對して自らの庶幾ふやうな批評や立論をする資格に著しく缺けて居ることを感じたのでございます。それは、第一、私は世の中の半分も見ない若輩であり、その上人の娘と云ふより他の資格を享有したことの無い身であるので、此の批評立論に必要な方面に於いて、その必要な程度にまで世の中の實際を経験知

了せぬ恨のあること。

第二、以上の缺點を補つて所論の據り所となるべき學識上の研究に著しい不足のあること、右の二點の上に、さらに今一つの困難は、僅かに學び得た知識又は實際に感得知悉せる事に於いても、その内容の性質上あまりに立入つた所まで、本誌に此のやうな体裁で公表するものには論じ得ない點のあることをごさいます。かやうな次第で本論の記述には或る不便を感じました、が此等の諸點を夫れ／＼適當に處置した上、出来るだけ現在の私の判斷を發表するに忠ならむとつとめましたことをお含みの上、本章をお読み下さるやうに願ひます。

### 1. 男女の意味

茲に云ふ男女の意味とは、人間界に男女といふ異つた兩性の存在する意味のことであつて、(甲)その男女兩性の存在するは何故からであるか、(乙)い、その存在は如何なる何事を人生又人類に寄與するものであるか、**ロ**、兩性の本來の傾

向天分はどうかあるか、といふのがその内容である。

そこでこれ等について兩氏はどう云うて居るかど云ふに、甲については、兩氏とも何等の言をも見せて居ない。勿論男女存在の事實はあまりに明白な事實である故、その事實を事實と認めて、その上に他の事項が立論されて居ることは云ふまでもなく、直ちに乙に就いて論述され、此の乙に就いての諸論が、凡て兩氏の説話全體の主調をなして居るのである。然し我々は此の甲即男女の存在するは何故からであるかを斷定せずには、論を確實に前進させ得ないのであるから、先づ此れに就いて一言せねばならぬ。と云うた處で、男女が別々の性質を以て別々に存在することは、我々の思索を遙かに超越して嚴存せる事實であつて、これを認めるより以上に出づることは勿論できない。「何故」と云ふのは、たゞそれに或る見解を附するのみの事で、現今の吾々の知識では原因を判然的確に説明し得ないのは已むるを得ぬことである。がとにかく私

は、人間の男と女とは、自然の運行上、宇宙の意志の歸極性の兩端を表はすもの、支那流に云へば陰陽を、科學的に云へば積極消極を示すもの、兩者相俟ちて離れ存する所に幽玄なる意味あり、又、合して一となる所に深奥なる意味ありて、その間に紫電飛び迅雷轟き、呼鈴もなり、羅針盤も動くと同様の人生の波瀾百出する次第、人類に要するもの十ありとすれば、互に其れを五づつ分けて、互に己れのみ有して他の有たぬものと發達させるに都合よく、相異なるもの、合して又分るゝ所に進化論の教ふる變化を多様ならしむるに都合よく、なほ其の上、男女の別存は人生の意識(凡ての生物の生存意識を)明瞭ならしむるに都合が好いので、かく成り來つた自然の事實であると見たい。下田先生の御著書の「女子教育」の附録に「女性に就いて」といふ一篇がある。その中にロシアのキエフ大學の醫學的物理学の教授で、シユクルヤレウスキといふ人が男女の特色を論じたのが紹介されて居る。それには「女子の性質は歴史的及び文化的

事情の偶然的生産物ではなく、生物學上大切な或る目的があつて、その目的の爲めに造られた」と云ふのを前提として、「性のある生物では元來は先づ女性が出来たので、男性は女性から分れて出たのである」といふことを、力の法則から説きおこして、いろいろと實例をあげて説明し、「それでどう云ふ工合から出来たものか分らぬけれども、此の女性的の個体から或時に男性的のものが出来たのである。是は生物學上重要な出来事である。此の男性の個体は顯勢的のものであつて、一代でありたけの力を出して終る。之れに反し女性の方は自分の体力の少からぬ部分を残して死ぬる。(中略)それで男性の顯勢的個体が出来てから、細胞が高等なる種に於ける獨立の有機体に發達することが出来る様になつた。それまでの女性的個体の場合に於ては、つぎ／＼に出来るものが、何時でも似寄つた大した差のないものである。所が男性の個体と女性の個体とがあつて、子孫の出来る場合には色々な性質のものが現はれて来る。随つて

その出来たものは、一條の鎖の代りに複雑した網のやうなものを形造る。(中略)それで詰り此の男性的個体の現はれたと云ふことが生物を複雑にし、また有機体の發達を促した譯である。即ち女性的個体は保存的であるし、男性的個体は改良的革新的である。此兩素が働いて來ると、追々と高等なるものが出来て來る。それで若し此の男性的個体が無くなれば有機体は又元の簡單なる有様に戻つて、單性生活の簡單さと憐れさになつて來る。即ち何時も男性的個体が進歩と複雑とを起すもので、女性的に變はれば有機的生活が單調になつて來るのである。それで一番宜いのは、此の兩素が共存して色々な結合、結果を生ずるといふことである。」と云うてあるが、これは即ち男女兩性の別存を認め、その特質とその歴史とを考へ得るだけ深く、研め得ただけ正確に科學的に調べての立論であつて、その究極はやはり自然が自らの發達のために、その意志を實現してかくなし來つたと云ふのである。私は以上を以て男女別存の事實に破るべからざる價值を附する思想の一端として置く。

さて乙即、イ、男女の存在は如何なる何事を人類に附與するものであるか、ロ、兩性の本來の傾向及び天分は如何と云ふことは、男女の差異、男女の關係と云ふことと相關聯せる問題であり、これに就いては兩氏とも委しく述べて居る。ロは便宜上、本章の(2)(3)に委しきを譲つて、主としてそのイについて、兩氏の論の究極は如何といふに、シヨ氏は男女の存在は種の保存繁殖の爲である。女子の眞の存在は全く種の繁殖と云ふことの中にある。(第五論)となし、ラ氏は、男女の關係を説いて、各々は互に他を保有せぬものを有して居て互に他を完成させ他によつて完全にせられるのである(第一段)と云うて居る處に見出すべきので、即ち男女の各別に存在し合して一となるに於いて、初めて人格の完成は全うせられるのであると云ふのである。然らば此の兩論に對する評論はごうなつて來るか云ふに、これ亦實際あるがまゝの事實であつて、ともに肯定せらるべきものであるが、

夫れ、違つた眼界に於いて見て居るので、同一水平線上に比較し得ない。即シヨ氏は哲學的生物學の見解の深處から云ひ、ラ氏のは其處まで突き入らない常識的道德的見解の上止まれるもの、現實の人生に立脚して凡ての方面から男女の意義を考究せむとする目錄見から云へば、此兩方面を併せ考へて行かねばならぬ。然して事實として研究しての上、兩論とも正に其通りであつて、共に駁すへき異論は無い。然し現實の人生に立脚して凡ての方面を包括して男女の意味を考究せむとすると、これ以上にもう少し云ひたいとがある。即ち私は兩氏によつて考へられた如上の見方の上になほ附加したい事實を持つ。それは何故かと云ふと、以上二論ともに、個人本位夫妻本位の見方として、單にけはしく男女と對立して見られる異性として考へられて居るのであつて、その人生との關係は更に讀者が講究して後ならでは見出し得ない(もとより思想はそれに觸れて居るのであるが)それで人生と云ふことを本位として、男なり女

なりの人生の意義として、男女を説いて居ないのでに慚らなく思はれるので、その方からの見解を添へたいのである。

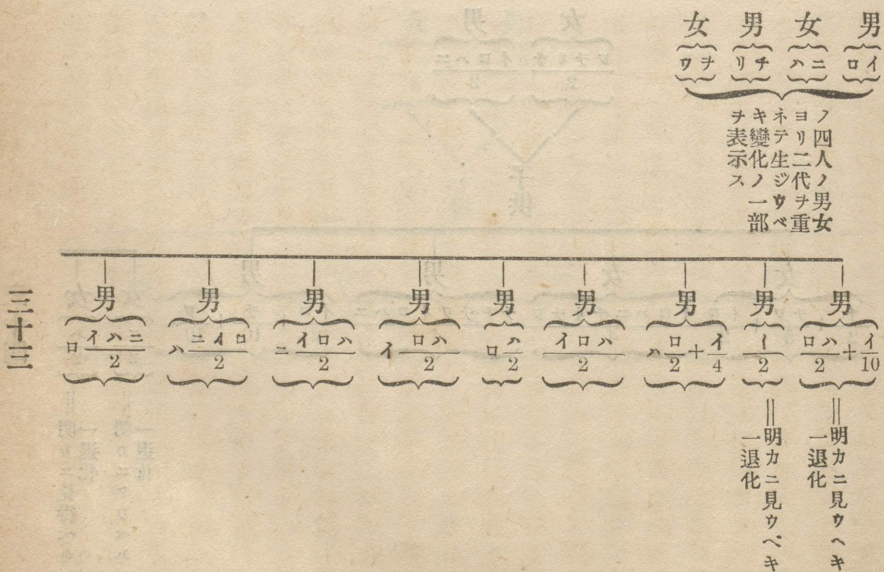
男も女も我れも他人も、それ自ら一人のみを見、考へればそれは正しく個人である。而も個人なるものは、決して事實としてそれ自ら絶對獨自に一個の存在を主張し得ないのである。即ち苟も統を引き親を有して我等が此の世に出て來た以上、我等は現在の自己を肯定する時に、我れの來りし過去あるを肯定せざるを得ないのであり、そして更に我れの行くべき、我れなる人格の影響を及ぼすべき未來との關係をも絶ち斷ることは出来ないものである。同時に空間的にも、今の我れを構成し來りし過去の物質的精神的條件の空間的存在を認め、今の我れの物質的精神的實體の成り行くべき影響すべき空間的存在を認めない譯には行かぬ。而して太初原人の發生以來既に二十万年、悠々として永かりし歲月を、人類は社會的生活を營み來つて地球上交通の四通八達し來りし今は既に個人といふ一人

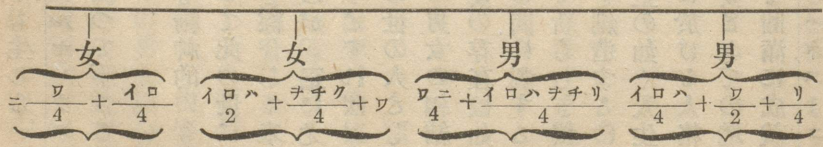
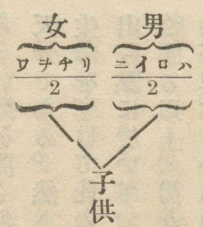
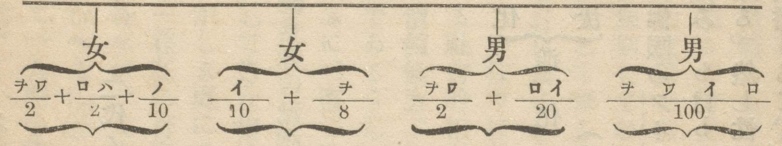
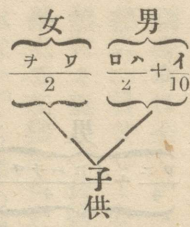
類は、それ自らの個人でなく、社會的存在の人類の一員としてのみ意味のある事實と成り來つて居る以上、今日の我々は、その社會的存在の一員として、過去、現在、未來との相對的關係を考へないでは、個人の意味を見出し得ないのである。それ故私は、社會的相對的渾一存在と云ふことを基底として（實際には更に明瞭に嚴格に國を基底とせねばならないが）その上に男女の意味を考へたい。社會的相對的存在の關係的方面を無にした絕對的の個人は既に吾人の腦裡には考へ得ない。（もとより個人の心意活動、官能の感覺性、技能の修習の主觀は絕對獨自のものである。）

然らば吾人のパーソナリテイの尊重とか、自己發展とか云ふ貴重な自由な發展的の思慮は此の考とは何等の交渉もないものか、一見別々な又は相矛盾せる如く見ゆる此の二つの考へは、その何れかが誤れるものであらうか、私の前に述べた所は此の世間に一般に尊信せられ價值ありとせらるゝ後の説を否定した窮屈な考である

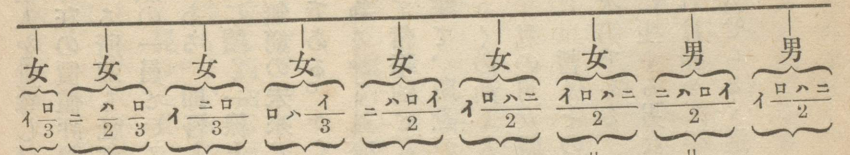
かど云ふに決してさうではない。後説は前説を立脚地として、その上に意味を生ずるものであり、事實としての前説を悟つて置いてその上に後説に頼つて自由に活動せねばならないのである。よしや後説を奉ずるものが前説を否定し若くはこれを全く考への外へおくとしても、事實は前説の斷する所に歸するを免れまい。（然し又前説が後説を束縛する後天的教權は一つもないごまでも事實として免れざる事柄なるを云ふ。）よしや全宇宙を縦横に揚々と翱翔するの概を有すとも、事實としての吾人は到底地球上の生物である。よしや曠野の空にたゞその芳香を散じて他なき野花の一莖の存在は、何等の價值的評價を絶した、因果關係の説明とは餘りにかげ離れた、殆んど絕對的のものであると見得るとしても、その花の其の野に咲けるのが事實である以上、その花の姿は體てその野の飾りでありその野のその時の有様の一部であり、その香りはその野のその時の状態の觀念の中に適歸すべきものではあるまいか。同様によしや絕對獨

自の存在として個人を尊重し、その活動發展を認めても、その存在の價值評價はその個人の存在の事實に立脚せる所即ち社會的相對的渾一存在者としての人類の一員といふ所に往いてせられねばならぬ筈である。即吾人は渺たる大海の一水粒而して無限に續く一線上の或る有限を劃して無窮の過去と無窮の未來とを繋ぐ一時の意識体にすぎぬものである。かく見來ると議論があまりに抽象的にあるか、見來ると議論があまりに抽象的に流れて哲學的となり、且つ宗教的の敬虔さを擁して來て、所説が横道に入りすぎたやうになるが、かくの如く人生觀を定めておいての上で、始めて私の男女觀が開展して來るので敢て讀者諸氏には暫くその迂と其の繁とを忍んでいたゞいた次第である。然らばかく見來つて、さてその上に生ずる男女觀は如何なるものであらうか、それは極めて平凡な事實、即ち次の表によつて一見せらるゝ進化論的實際に外ならぬのである。

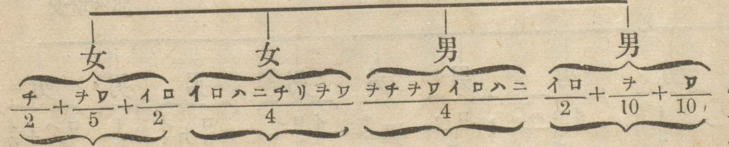
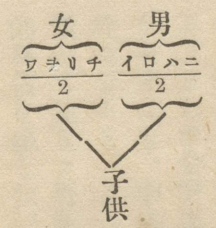




三十五

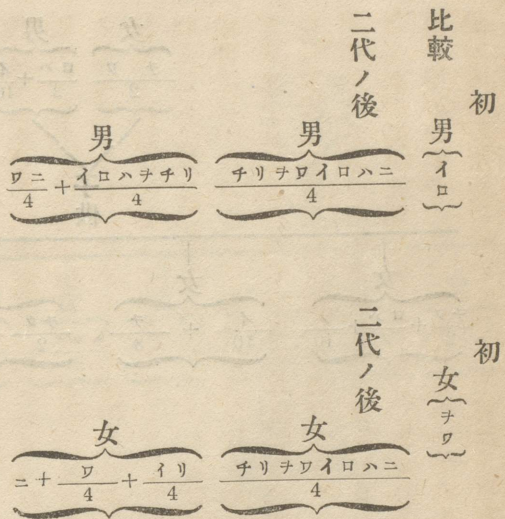


一進化  
 一明カニ見ウベキ  
 一進化  
 一明カニ見ウベキ



一退化  
 一明カニミウベキ  
 一退化  
 一明カニ見得ベキ

三十四



ツドもオデッセーも生じる」と云うたさうだがこれは前のシユクルヤレウスキー氏の説とこもに、私の愚見を飾つて下さる有力な又面白い證言である。

吾人は身体的にも精神的にも既往をうけて將來を開く約束をもつて此の世に生れて居るのである。つまり過去を綜合して未來の爲めに更に新しい道を開くのが、正に尤も偉大なる吾人の天分である。然りとすれば、而して吾人人類が生命を享けて此の世の人として出で来る最初の出發點に於いて、男女の相結合することを必要とする以上、男女の存在は如何なる何事を人生に寄與するかとの間に對する答への第一は、人類の後繼者として新らしき變化せる無限の未來をもつた新人類を創造するにありと答へざるを得ぬ。更に又以上の如く人生を見來つた時、かゝる意味の人生に於ける人格の完成は子としての境遇、夫又は妻としての境遇、親としての境遇の三段階を経て圓滿に成就せらるべきものである、故に彼のヨハネスミュラアの所謂「たゞ

男女の結合するに於てのみ人の人たる全幅の眞を見る」と云ふを、價值ある評言として尊重せねばならなくなつて來る。男女存在の意味の説明は以上を以てつくした譯であるが、かうなる男女相結合するを豫期してのみ、男なり女なりそれ自身の價値が生じて來るので、人の世の實際に數多き獨身者——人として尤も優越せる偉大なる一生を示すとの往々にして繁き——その獨身者は全くかゝる社會的相對的渾一存在の人類の一員としての價値無き、その評價以外に超然たる無用の長物であるらしくなつて來るが、果して左様かといふに、否、否、決してさうではない。それ等の獨身者の活動、その人の智能の所産等は、往々にして男女相結合せる人々のなすよりも更に輝やかしき更に貴重なる効果を此の社會的相對的渾一存在に寄與してゐる。即ち相結合せる男女の各々が、人の身体を通しての奇しき創造傳統を行へるに反し、此等の獨身者は身体を介せずして、人間の精神、技能其れ自身の直接の授受に於いて、又精神技能の上に奇

しき創造と傳統とを行へるものである。(勿論相結合せる男女の各々が亦これを行ふ)かくて往を受け來を開くつとめを立派に行ひ得るのである。又さまで著しくないものは、自身がその生命の活力を心のまゝに行使して何等かの仕事に従事して居る間に(その人自身は決してかやうな深甚な意義を一々考へて居らないにしても)現在の社會生活を都合よくし、身体的になり精神的になり技能的になり奇しき創造と傳統とを行へる人々を培ひ育てるの務を果し、社會的相對的渾一存在者としての人類に何物かを附與して行くことを見ることが出来、價値を附することができる。故にかく見來る時はその内容の價値の高下はあれ、外觀に於てはあらゆる人の社會的相對的渾一存在者としての價値には高下がなくなる。そして若しも等しく内容の價値の高いものである時には、その男女結合せる一人たる即ち身体的精神的技能的の創造者傳統者たる獨身者即ち精神的技能的の創造者傳統者たる將た又よき培養者たるにかゝはらず、その崇高さ眞

面目さに變りはないのである。而も（若しも客觀的存在に主觀性を投射することが許されるならば私は茲に自然は實に智情意の完全圓滿なる作用者であると云ひたい。天は悉民を生じ憐然として個人を保護し育成することにも、一面には冷々として聰明なる知慮を以て個人を人類の社會の犠牲となし培養者となし、實らぬ花と結べる實と又根と葉と莖とそれ／＼の存在の數量を好い加減に調和して行く。かくて男女結合せる真人としての一生も、人類の花とも稱ふべき獨身の一生も自ら意識し得るは所謂人生五十年のそれ以上にはでられないのであるものを。實を結び種子を残して或る物質の仲介物を存留することによつて身体的精神的技能的傳統を確めて無窮に歸するも、はた又ひと時の香に匂ふ色うるはしき花と榮えて空しく萎み去つて無限に入るも、ともに意識ある間は畢竟永劫中の一刹那であるものを。それをなほかく縷々と思慮をめぐらしてさてその後ならでは美はしき安立を感じ得ぬは亦その一瞬の人生への執ありて

その五十年の歲月の貴く惜しう、心から底からの眞面目さを以てとまれ努力せむと思ひならせる自然の配采の巧妙さであらう。呵々。それはとまれ、以下改めて女子についてののみその一生の意義を説いて見れば、先づ人の子として此の世に生れ、娘としての境遇にあつては幼少なる折には親の愛の至純至厚なるものに抱擁せられて、その母なる人のやさしい腕に無心に抱かれてスヤ／＼眠るその時に、乳房をすゝるその時に、はたまた五つ六つとなつて野邊に蝶追ひ花つむむ時に、強烈なる親の愛を意識下に感得してそれに頼り、無限の安らげさを知りて生の喜びの第一歩を無意識に味はひ、更に物心のつく頃からは我れに盡くし、我れをまもる親の愛を有り難しと感じるようになり報恩といふ此の上なく美しい謙遜な殊勝な感情、孝の心、生涯を通じて涸れぬ眞面目な努力の感の源泉を深くも湛へ、孝と思惟する行爲に出でようとなつとめる。次に人の妻といふ境遇に入つて（又はさらずとも人を戀ひ人を愛して）後、初めて鮮やかな

意識の上に人生を見るやうになる。即ち蕩然たる愛の至純至厚なるものを、愛の嬉しさ愛の柔らかな愛の美しさとして精神の底の底から呼吸して、初めて脈々として天地の眞に通ふ我が生命の強さ尊さを思考のみでなく實際に淡き美はしさの濃き想念として體驗し、生の意義のドン底までつきとめた即ち徹底した人物となつて來るのである。（これは宗教的機縁によつて此の境に導かるゝこともあると信ず）かくして立ちかへりて來り見る世に、その人の人生の行歩は堅實になり、云ふに云はれぬ落ちつきができ、立派な人生の經營者となるのである。ハテ好いはいの、金より命が大事なり。迎ひが來れば往かねばならず、三年の内逢はれぬぞや、死なふも生ふも知らぬもの、迎ひの來ぬ間につい鳥渡門出祝はを御座んせ」と、泣腫れし目を莞爾と、涙片手の暇乞ひ……と藤内二郎盛治の女房小廝の宇治の里での絶唱も生み出されるのである。而して此の時代既にその親としての心掛けが意識下に動いて居るのである。更に第三の境遇に

於いて人の母となつては、全心これ凡て子のための存在、全身これ凡て子のための犠牲、今は全く人類の擁護者としての實行者、すでに蕩然たる愛に酔うて人生の甲斐あるを樂しむ呑氣さは續けて居られない。丁度豆の實が時かれて既に芽を天に向けて出させ、根を地に深く入れさせ、子葉を育てその子葉が獨り生存を營み得るに従つて、次第々々に黃落して行くと同じに、ジリジリとその身を枯らしてそれをその子の上に見ては實に涙の出る尊さの生涯を送るやうになる。嘗つて「無意味な日暮し」と云うた一日を三人の子持つ或る母親は「かあさんなどは毎日意味がありすぎて困つてしまふ」と言うて笑つた。

私は女は子としては（男女とも同じなるべし）自らの發育に（多くは無心で）全力を盡す間に孝の心を養ひ、孝と信する所を行ひ、人の妻となつては夫にやさしく事へ、更に母としては、子を産み、よくその子供を保護教導して一人前の人

間に育て上げることなして、始めて社會的相對的渾一存在者としての人類の女子たる意義を全うするものと斷言したい。そしてその三つの身分を経て始めて圓滿な人情を有する人となり得るのである。(もとより心しての教育修養は此の境に入らずして入りしと同一の修練を積ませ得るが、それでもなほ實際に入りしとなき境のことは、或る所に於いて體得し得ぬものが生ずると思ふ)

即ち男女の別々に存在するは、相異なるものを發達させるに都合よく、而してその別存は結合を豫期し、その結合は一面に於いては種の繁殖が行はれ、一面に於いては眞の人らしさの出發點となり、完全なる人格としての存在を肯定し得るに至るのである。それ故女子教育に於いては、その妻たり母たり得る女、次代人類の創造者、人類の活動者たる男子の助力者たり得る女をつくり上げるに基礎をおき而して更に社會の實情を參酌して、その經濟的關係やその他種々の人事上の事情より獨立獨身を余儀なくさせらるゝ女

子又は天才の蔽ひ得ぬものを有するがために、好んで(又は無心に)獨身者として人類の花として人類の歴史をかざり若しくは國に盡さんとする如き女子のとをもよく考へて、それ等の人には特殊の教育を與へ決してそれ等の人を卑く見ばならぬ、女子の教育についてはかゝる意味からしてもなほ云ふべき云ふべき多くのことを有するが、それは後段にその章を有する故に、茲には云はず、ただこゝに強く主張したいのは、世間において、男にあれ、女にあれ、(尤も男子に就いてはあまりにどかくの批評はないが)獨身を立て通す人に對して、その人々のその獨身である事情や又動機に深い涙や深い清らかさのあることを耐度もせず、その人の人格を尊重することも知らず、又獨身者が人類の花として將た培養者として如上の價値を有するを考慮せず徒らに冷評熱罵甚しきは根もない憶測や嘲笑を浴びせかけることがある、私はその馬鹿らしさを惡まずには居られない。美しからぬ事實を

有して、強ひてそれを蔽はんとする人はいさ知らず、全く高く清き目的を以て意志堅固に清い日暮しをする人もあるものをと、社會の卑き不眞面目な批評待遇をいさとぼらすには居られない。社會の人士は如上の深みから老へて、老いたる獨身の女子などに相當の尊敬を拂はねばならぬ。

更らに一言すべきは、本節に私が述べたやうなことは、丁度地球の圓球なることを現今の小學校兒童の凡てが知れる如くに、將來は國民的教育の教課の中にその最も嚴肅なるものとして包まれねばならぬ筈といふ一事である。もとより必ずしも小學校兒童に教へよとは云はねども。(未完)



ほととぎす平安城をすらかひに  
燕村